

## 民泊

柳生 時実

チェックアウトの時間に、替えのリネンとタオルを持って、民泊をしているマンションにきた。わたしが運営している民泊は大阪市中央区にあり、周辺はテナントビルを民泊に改装した物件や、新築の民泊専用マンションが次々と建つ激戦地区となっている。その中でわたしが借りている部屋は、築年数が三十年を超える古びたマンションの一室だ。

マンションの入り口にある集合ポストの前に立ち、自分の部屋の郵便ポストを開け、中に入れてあるキーボックスを確認した。たこ焼きのキーホルダーを取り付けた鍵は返却されている。ゲストはすでに帰ったようだ。民泊では宿泊客をゲスト、宿主をホストと呼んでいる。別の挨拶が出来なかったのは残念だが、エレベーターに乗り込み部屋へ向かった。

玄関ドアを開けて入ろうとしたら、足元が空箱の山で立ちふさがっている。それは三つの大きな紙袋の中へ無

造作に投げ入れられていた。どれもドラッグストアで売っている商品だ。その山が崩れないよう脇へよけてスペースを作り、靴を脱いで上がった。いつものように順に部屋の汚れ具合の確認を始める。キッチンのガスコンロは料理をした形跡はないが、シンクの中に汁の残ったカップラーメンの容器が重ねてある。冷蔵庫を開けると、飲みかけの牛乳パックが残されていた。わたしは牛乳パックとカップラーメンの容器を洗い流して、取り出したゴミ袋に入れた。洗面所の洗濯機には使用したバスタオルが投げ入れられてあり、ユニットバスをのぞくと床には髪の毛が沢山落ちていた。シャワーでそれを簡単に流し、バスタブに洗剤を吹き付けた。それから、トイレをチェックする。目でチェックしながら臭くないかと息を吸った。ゲストによっては尿を床に漏らしている事があり、臭いを取るのが大変なのだ。今回は大丈夫なので安心して居室へ行く。ドアを開けてベッドを見た。掛け布団は整えられている。部屋全体に目をやると、床一面がゴミでおおわれている。ここにもドラッグストアで買った商品の空箱に百貨店で買った化粧品、ラグジュアリーブランドの空箱などで足の踏み場もない。こんなに沢山の買い物を三泊の間にするのは大変だったである

うが、せめて部屋に備え付けてあるゴミ袋へ入れてあつたら清掃が早く終わるのにといいながら、片端からゴミ袋へと捨て始めた。

二時間後、清掃を終えたわたしは大量のゴミ袋をごみ置き場へ捨てに行き、再び部屋へ戻って最後の確認をした。リモコンの電池が切れていないか、ベッドや床に髪の毛が落ちていないか、新しいタオルを置いたか、冷蔵庫を空にしたか等だ。最後に使い捨ての新しいスリッパを玄関に置いて、使用済のリネンとタオルを入れた袋を手にしてドアから出た。帰ろうとしてマンションの玄関へ行くと、大きなスーツケースを携えた中国人らしい母娘がわたしの部屋の郵便ポストを開けようとしている。折りたたまれたベビーカーもあり、よく見たら娘は赤ちゃんを抱っこひもで抱いていた。わたしは民泊をはじめから、出で立ちでどこの国から来た人かを何となく推測できるようになっていた。それぞれのお国柄が外見に現れているのだ。二人の服装は、母親が黄色のジャンパーを羽織り、胸に赤ちゃんを抱いた娘はスラリと伸びた長い脚にスリムなズボンが似合っている。今日チェックインのわたしの部屋のゲストはオーストラリア人のカップルなので、この家族はきっと隣のマンションにある民

泊と間違えたのだろう。

「エクスキューズミー」

わたしは母娘に声を掛けた。

「アーユー、マキコ？」

娘はわたしの顔を見て、笑顔になる。なんでわたしの名前を知っているのかと戸惑う。もしかしたら、以前、うちを利用したゲストが、今回は隣のマンションの民泊に来たのか？ と思い、わたしも笑顔を返してバッグからスマートフォンを取り出した。素早く翻訳アプリを起動させ、簡体字を選び「あなたは何を探していますか？」と入力して、翻訳された画面を見せた。

「ゲスト、ゲスト」

母親は大きな声で答えた。

「ゲスト？」

わたしが小首を傾げると、娘が自分のスマートフォンを見せてきた。画面を見ると、わたしとやり取りしたメールだ。相手のメールのアイコンに記憶がある。おかしいな、今日は若いカップルのはずなのに勘違いしたのかもと考え、わたしのスマートフォンから民泊のサイトを確認する。やはり思ったとおり、今日のゲストはこの母娘ではなかった。

「今日のゲストはあなたではない」と翻訳アプリに入力して、差し出した。スマートフォンをのぞきこんだ二人は驚き、見ろというように、自分たちのスマートフォンをもう一度私の目の前に出してくる。その表示は中国語になっていたので、自分のスマートフォンで同じメールを探して出して読み返した。良く読むと、母娘の予約は丁度一ヶ月先になっている。わたしは予約日の部分を拡大して娘に見せた。はっとした表情をした娘は母親へ話しかけ、二人は何か言い合っている。

「今から新しい宿は探せないから、三泊ほど泊めてほしい」

娘はわたしにスマートフォンを見せて来た。

「ノー」と言いながら、今日は予約があるので、無理だと翻訳して見せた。何度も互いのスマートフォンを見せながらやり取りするが、何とかしてくれとの一点張りです。埒が明かない。困ったわたしは博美の所は空いているかとも思いつき、電話することにして「ちよっと待って」と手で制した。

「博美のところの部屋、空いてない？」

「今晚？ 空いてないけど何かあったの？」

民泊仲間の博美は、わたしの民泊の近くで五部屋を運

営している。彼女とはホスト同士が直接会って交流するミートアップという催しで出会った。民泊というものが一般的ではなかった今から三年前の事だ。わたしは日ちを間違えて来てしまったゲストがいると手短に話した。「明日からだと二泊空いているよ」

ゲストに聞いてみると一旦電話を切り、娘に伝えた。博美の民泊もここから近いから、今日だけでもどこかホテルを探したらと勧める。しかし、明日からは博美の所で良いが、今晚のホテルを今から探すのは大変だと言う。どうやら、ホテルだと金額も高くなるし、赤ちゃん連れなので、どうしても民泊が良いらしい。これ以上やり取りしても、頑固な母娘は納得しそうもないと観念して「わたしの家に今晚は泊まって下さい」と伝えた。それを翻訳アプリで読んだ二人は「サンキュー、サンキュー」と繰り返して喜んだ。それから、宿泊料の交渉をした。今回は博美の所での二泊も入れて日本円の現金で二万四千円もらう事を了承させた。すると、すでに民泊のサイト経由で支払った一ヶ月後の宿泊料はどうなる？ と言ってくる。わたしは今日サイトでキャンセルの手続きをしたら、全額返金になるからと説明したが、半信半疑の表情を向けてくる。疲れたわたしは後でやり方を教える事

にして、取りあえず、うちへ母娘を連れて帰る事にした。そして博美に、明日から一泊お願いしますとメールした。わたしの車を駐車している近くのパーキングまで母娘を連れて行き、二個のスーツケースとベビーカーをトランクに積み込む。そして後部座席に座らせ、赤ちゃんを抱いた娘にシートベルトを締めさせた。うちに帰れば八カ月になる孫の為に買った新品のチャイルドシートがあるのだが、今日は急なので仕方ない。違反は承知だが、まあ大丈夫だろうと車を発進させた。

わたしの自宅は南船場から車で二十分程の場所にある阿倍野の一軒家だ。夫は単身赴任で東京に住み、一人っ子の日花里は結婚してニュージーランドにいる。四年前、ワーキングホリデーで一年間ニュージーランドに滞在して、その時に知り合った日本人と二年前に結婚して再び行ってしまったのだ。それで今のわたしは気ままな一人暮らしだ。家の造りは五年前に亡くなった義母との二世帯住宅なので、この母娘は元義母宅へ泊らせるつもりだ。そこは、いつでも娘が婿と孫を連れて戻れるように、布団などを準備しているから都合良かった。

自宅へ着き車を車庫に入れて「着きましたよ」と日本語で声を掛けてエンジンを止めた。二人は意味を理解し

たようで、わたしが車から降りると、続いて出て来た。トランクを開け、スーツケースを下ろそうとすると娘が横に来て手伝ってくれる。

元義母宅の玄関ドアを開けて、わたしが先に入った。客用のスリッパを出し、靴を脱いで上がるよう手振りで伝える。そしてリビングまで案内した。娘は赤ちゃんを抱っこひもから下ろして、ソファアへ寝かした。今まで赤ちゃんはぐずりもしないで、とてもおとなしかった。どうやら、ずっと寝ていたらしい。寝返りを打とうとした赤ちゃんがソファアから落ちそうになり、娘が素早く抱き上げた。赤ちゃんは驚いたのか、大きな声で泣き出してしまふ。風呂や電化製品の使い方を教えたかったが、泣き止まそうとして授乳を始めたので、いったん自分の所へ帰る事にした。わたしの住居部分に通じる内扉を教え、落ち着いたらノックしてと、また、身ぶりでも伝えた。一旦玄関から外へ出て、自分の住居側の玄関ドアの鍵を開けて戻る。民泊のゲストとはいえ、自宅に見知らぬ外国人がいるのは落ち着かないので、互いに行き来する内扉の鍵は掛けたままにしておく事にする。鍵は元義母宅側からは開けられない仕組みだ。予定していない今日の出来事でも疲れてしまい、冷蔵庫から飲み物を取

り出すと、ソファにもたれて休むことにした。いつの間にかうとうとしていたようで、内扉をノックする音で目が覚めた。わたしは鍵を開けて、母娘のところへ行っただ。リビングに入ると続きの和室に布団が敷かれ、赤ちゃんや寝ている。説明しなくても、布団の使い方はわかっていようだ。そして二人にミニキッチン、風呂の使い方をお教えると、夕飯を作るので食品の買い物へ行きたいと言ってきた。歩いて五分の場所にスーパーがあるので、後で案内すると伝えると、笑顔を見せた。そして何やら楽しげに二人で会話を始めた。スーパーへ行く用意のため、わたしは再び戻った。

化粧直しをしながら、日花里とスーパーで買い物をしたのはいつだったのかと思いついた。小学生の頃は、しょっちゅう一緒に行ったが、中学生になり部活動が忙しくなると付いて来なくなった。今、遠いニュージラードでの買い物はどうしているのだろうか。赤ん坊の駿太を連れて出かけるのは大変だろう。だが、駿太の成長の写真や動画は送ってくるが、困っているなどの泣き言はひとつも言っていないのでわからなかった。

日花里は駿太を産むのに里帰りをせず、ニュージラードでの出産を選んだ。わたしは外国で産む事に賛成で

はなかったもので、帰国するように話をしたが、彼女の気持ちは変わらなかった。それなら仕方ないので、産後の手伝いに行くつもりでいたが、婿の両親にお願いしたからと断られてしまった。相談もなく思いもよらない話で驚いてしまい、わたしは怒りの言葉をぶつけた。それから日花里とわだかまりが出来てしまった。孫の駿太には会いたい、今さらわたしに向こうへ行く気にはなれず、いつか帰省する日を待ち望んでいるのだ。

近くのスーパーまで母娘と一緒に来た。ベビーカーに乗せられた赤ちゃんは大人しく、ゆっくり商品を見られそうだった。二人は野菜売り場で品定めを始めた。母親がバラ売りのトマトを手にして、何やら娘に話しかけた。娘はうなずいたので買うのかと思ったが、母親は元に戻して違うトマトを取る。どうやら時間がかかりそうなので、わたしは自分の買い物をすることにして、ひとりで先に進んだ。

レジ付近で商品を選んでいると、母娘がやってきた。かごに入れられた商品を見たら、砂糖や塩などの調味料も入っている。わたしはそれらを指して手を振り、買わないように伝えた。家にある物を貸すことにする。

買い物を終えて帰ると、すぐに調味料を母娘に持って行った。わたしの晩御飯は、冷凍したカレーと白米を解凍して、さつきスープで買ったサラダですませる予定なので使うことはない。

ソファで何やらスマートフォンをいじる娘に「キャンセル」と声を掛け、一ヶ月後の予約を取り消すやり方を教える。娘はすぐに手にしたスマートフォンで民泊のサイトにログインして手続きをはじめ、やり終えるとキッチンにいる母親へ大声で伝えた。そしてわたしに「サンキュー」と嬉しそうな笑顔を見せた。そして、取り決めた今日と明日から博美の民泊で二泊する宿泊料の二万四千円をもらった。今晚はこれでわたしの出番は終わりのようなのだ。明日の予定を聞き、何時頃にここを出るのかなどのやり取りをスマートフォンアプリを紹介してやり、自分の所へ戻った。

夕食を終え風呂から出ると、明日の打ち合わせのために博美に電話をする。

「明日、そっちへ何時に行けば良いかな」

「清掃が終わる四時以降にしてほしいわ」

電話にすぐに出た博美が答えた。

「わかった。そしたら明日は戎橋まで案内してから向かうね」

「マキコもゲストと一緒にうちに来るの？」

「今回のゲストは博美の民泊のウエルカムガイドを持ってないし、行き方わからんから」

「うちのウエルカムガイド、直ぐにマキコに送るよ。ゲストへ転送して、よく読むように言ってる」

「わかった。わたしとはぐれた場合、持ってないとゲストが困るよね」

ウエルカムガイドとは、空港から民泊への道順、部屋へのチェックインの仕方、部屋の中の電化製品の使い方や過ごすにあたっての注意事項などが書いてあり、予約が決まったゲストにメールで事前に送るものだ。部屋の中にも同じものを印刷して備え付けてある。

「戎橋まで連れて行くなんで、今もマキコはゲストと交流してるのね。わたしは忙しくて、このところ全然してない」

「うちも最近チェックインの時に立ち会うだけになったよ」

「久しぶりにゲストにおもてなしたいから、明日は一緒に戎橋へ行くわ」

思わぬ博美の言葉がうれしくて「ホントに助かる」とわたしは声を弾ませた。三年前のミートアップで博美に出会った頃は、ゲストと一緒に大阪城などの観光地へ行っていったが、慣れてしまうとメールでのやり取りで終わる事がほとんどになってしまった。

わたしと民泊との関わりは三年前に日花里がニュージーランドでのワーキングホリデーを終えて帰国してから彼女が民泊を始めたので、それを手伝うようになったのがきっかけだった。当時はまだ民泊という言葉が聞いたことがなく、どんなものなのか分からなかったが、日花里と一緒に立ち上げるのは楽しかった。民泊をしても良いという物件探しからはじまり、ベッドなどの家具をそろえ、それに合うインテリアを揃えてと、今思えばすと本当に懐かしい。博美との電話を切ってから、日花里と楽しく民泊を始めた頃を思い出して、胸がいっぱいになった。

そろそろ寝ようとベッドに潜りこむと、どこからか赤ちゃんの泣き声がある。空耳かなと思ったが、だんだんと大きくなってきた。じつと耳を澄ますと、下から聞こえてくる。寝ている部屋の真下は、元義母宅の和室だ。泊まっている赤ちゃんの夜泣きのような。昼間は手の掛

らない赤ちゃんだったが、移動の疲れがある上、慣れない場所で泊まるので、気が高ぶっているのかもしれない。しばらくしたら泣き止むだろうと思いつつ、目をつむって寝ようとしたが、いつこうに泣き止みそうもない。

もしかしたら具合でも悪いのかなと心配になり、スマートフォンを手にして階下に降り、元義母宅に通じる内扉越しに耳をそば立てた。赤ちゃんの泣き声と共に子守唄のような歌声が聞こえてくる。わたしは内扉をノックした。反応がないので、数回、強くノックして「ハロー」と声を掛けた。すると歌声が止み、何かこちらへ話かけてきた。わたしは鍵を開けて、内扉の向こう側をのぞいた。

母親が赤ちゃんを抱きながら、こちらへ歩いてくる。赤ちゃんは一瞬泣き止んだが、更に大声を上げた。わたしは「赤ちゃんは大丈夫ですか」と翻訳アプリを見せた。彼女は「大丈夫」というように頷いたが、腕の中の赤ちゃんをあやすのは止めずに身体を揺らしている。

大変そうなので代わってあげたいが、見知らぬわたしが抱いた所で赤ちゃんは泣きやまないと思いつつ「オーケー？」と聞いた。

「オーケー」と母親は答えたが、まだ泣き止まない。娘

はどうしているのかと部屋を見渡すと、和室の布団で眠っていた。母乳を与えていると体力が要るので、とても疲れているのだろう。

しばらく様子を見てみると、母親は子守唄を歌いながら部屋の中をぐるぐる歩いている。赤ちゃんもやっと疲れたのか、だんだんと泣き声が小さくなってきた。わたしは内扉をそつと閉めて寝室へ戻った。ベッドに潜りこんだが、眠れそうもない。思いおこせば日花里も夜泣きをする赤ん坊だった。おむつを替えて母乳をお腹いっぱい飲ませて、ベビーベッドへ寝かせると全身を震わせて泣き出した。仕方ないので抱っこをしてあやしなが泣き疲れて眠るまで、部屋中をぐるぐる歩いていたのだ。

孫の駿太は夜泣きをしているのだろうか。スマートフォンで駿太の写真を見始めた。日花里に似ていたら、きっと夜泣きで大変なのではと思う。まだ一度も抱いた事のない駿太をこの手であやしてみたい。ぐずぐずしていたら、赤ん坊はすぐに大きくなってしまふのだ。物心ついてから会っても、きつと人見知りされてしまう。わきあがる焦りで、わたしは胸がいっぱいになってしまい息苦しくなった。

朝になり約束の時間になった。わたしは一旦玄関を出て、隣の玄関ドアのインターフォンを鳴らした。応答があつたので、鍵を開けて中に入り声をかけてみた。どうやらまだ用意が出来ていないようで、母親が上がるように促してくる。リビングに入ると赤ちゃんがハイハイをしながら声を上げていた。夕べとは違ってご機嫌ですね、と翻訳アプリで伝えたら、母娘が笑顔を見せた。まだ荷物をもとめていないので、どのくらいかかるのかと聞くと、一時間ほど後に出たいと言う。それなら用意が出来たら、うちのインターフォンを鳴らして、とやりとりして一旦帰り、車に新品のチャイルドシートを取り付けた。駿太用だが、ゲストの安全のためには仕方ない。

まだ時間があるので、博美へ電話して待ち合わせの間などを打ち合わせているとインターフォンが鳴った。どうやらチェックアウトの時間が来たようだ。再び戻って部屋の中を簡単にチェックして鍵を返してもらい、スーツケースを車に積み込んだ。それから運転席でエンジンをかけて母娘を待った。すぐに乗り込んできた娘は自分のスマートフォンを見せてきた。覗き込むと画面には心齋橋の大丸南館にある免税店が表示されている。ここへも行きたいらしい。わたしは戎橋へ先に行くよりは、

大丸の駐車場へ車を止めて、そこから歩いて南館へ連れて行き、買い物を行っている間は博美とお茶でもして時間をつぶし、それから戎橋が架かる道頓堀まで歩いてグリのネオンサインを見て、帰りはゆっくり周辺の店で買い物してから博美の民泊に行くように勧めようとプランを立てた。

母娘を大丸南館の免税店へ送り、博美と待ち合わせた喫茶店へ入ると、すでに彼女は座っていた。博美は腰かけたわたしに「日にちを間違えてやって来たゲストってどんな人？」と聞いてきた。

「感じの良い母娘やし、何も問題はなかったよ」と、わたしは微笑んだ。

民泊のゲストはほとんどが外国人である。トラブルはめったにないがやはり国によって習慣が違うので、ルールをはっきりと事前に提示する事が重要だが、今回のゲストは日程を間違った上、強引に泊めてほしいと交渉してくるので少々不安だったが、綺麗に使ってくれていて何も問題はなかった。

「それだったら良かったわ。今日から泊まってもらうから安心したよ」

「母親思いの娘さんは日花里と同じくらいの年で、本当に仲良い母娘やわ。駿太と同じくらいの赤ちゃんもいるよ。それで日花里を思い出でしまった」

「日花里ちゃん、いつ里帰りするの？」

「しばらく帰ってきそうにもないわ」

「外国での子育ては大変やろうと思うよ。困った時に助けてくれる人はいるの？」

「何も言っていないから、なんとかやってると思う」

「親に頼らんでも一人で出来るしっかりした子に育てたのはマキコやねんから、遠慮なんかせんと孫の顔を見に行けばいいのに」

「でも、来てとも言われへんのに、わたしからはよう行かんわ」

「水臭い親子やね。私なら来るなど言われても押しかけるけどな」

わたしは「そう出来たら良いけど」と頷いた。

時計を見るとゲストの母娘と待ち合わせの時間だった。

「そろそろ行こう」

博美が伝票を手にして立ち上がったので、わたしも後に続いた。

心齋橋筋商店街に出ると、平日なのに人であふれている。わたしは博美の後ろを歩いて、母娘と待ち合わせした大丸南館前に向かった。すぐに大きなスーツケースを引いている外国人カップルが間に割って入って来てゆつくり進むので、博美から離れないよう流れに逆らって彼らを追い抜こうとしたら、前から小旗を掲げたガイドが引率する団体客が押し寄せて来て進めない。博美の後ろ姿がどんどん遠のいていく。焦ったわたしは「すみませんと免税品の袋を下げたまま立ち停っている外国人を身体で押しのけ、何とか博美に追いついた。

「いつの間にか心齋橋筋商店街は外国人ばかりになったんやろう。歩くのさえ大変やわ」わたしは博美に話しかけた。

「ホントやね。歩いていても聞こえるのは外国語ばかり」「もしも、ここから外国人が消えたら、寂しい街になるよね」

「インバウンドが来る前の心齋橋は、平日の人出なんて本当にまばらやった。外国人はたまに見かけたくらい。今ではわたしらの民泊がある南船場周辺の店まで、外国人の店員さんばかりやから、もしいなくなったら店もや

つていけなくなるわ」

「ほんまやね。マクドナルドにこの間入ったら日本人の店員さんはいなかったよ。客は日本人の方が多かったけど」

「日本人はたいてい一人くらいやわ。この辺歩くと海外いかんでも、旅行気分になるよね」

博美と顔を見合わせて笑った。

母娘は時間通り、大丸南館から出て来た。

「それではグリコサインを見にいこう」

母娘を博美がうながして、再び、心齋橋筋商店街を戒橋へと歩き始めた。ドラッグストア前を通ると、中国語で呼び込みをしている人がチラシを手渡してきた。見ると中国語で印刷されたクーポンだった。わたしは母娘にそれを渡した。人ごみの中を母娘は、ゆつくりと左右の店を見ながら歩いている。娘は胸に抱いた赤ちゃんの頭に時々手を添えている。母親は娘と並んで時折顔を見合わせてしゃべり、異国の商店街を楽しんでいるようだ。

十五分ほどで戒橋へ着き道頓堀にかかる欄干を見た。グリコの看板を背にした沢山の観光客が、グリコポーズを真似て写真を撮っている。わたしたちは丁度良い撮影ポイントが空くのを待った。しばらくすると欄干沿いが

空き、母娘に青い大きなグリコの看板がバックに入る場所へ行くように促した。わたしは娘のスマートフォンを受け取り、写真を数枚撮った。スマートフォンを娘に返すと、母娘は顔を寄せ合って画面の写真を確認する。

「オーケー」娘が笑顔で答えた。

博美の隣へ戻ろうとするわたしを母親と一緒に写真を撮ろうと肩に手を置いて二人の間に立たせた。横の娘は片手で赤ちゃんを抱き、バッグの中をまさぐっている。わたしは「危ない」と、思わず赤ちゃんを取り上げて抱いた。見かけよりもずっしりと重く、身体もしっかりしている。

「ボーイ？」

「イエス」

今ごろ気が付いたが赤ちゃんは男の子だった。初めて男の子の赤ちゃんを抱いたわたしは、肩に力を入れて落とさない様に緊張する。娘はバッグから取り出したカメラを博美に渡して、グリコポーズをとった。

「セイ、チーズ」博美がシャッターを押す。

わたしは笑顔でレンズを見ながら、赤ちゃんを少し掲げた。彼の頭から、石鹸と乳の入り交じったような懐かしい匂いがする。赤ん坊は皆、同じような匂いがするの

だろう。駿太もこんな匂いがするに違いない。息を胸いっぱい吸いこむと、思わず涙が滲んだ。カメラの向きを変えて数枚写真を撮り終え、赤ちゃんを娘に返そうとすると、母親が抱き取ろうと手を出してくる。胸で大人しく抱かれた赤ちゃんを手放すのが急に惜しくなり「しばらく抱っこします」って伝えて、と博美に言った。彼女は一瞬驚いたが、翻訳アプリで伝えてくれた。母娘は笑顔で了承し、わたし達は心齋橋へと歩きだした。赤ん坊は重く腕が疲れるが、安心したようにわたしに抱きついてくるので、温かく心地よい。

駿太を抱っこしたい！

わき上がる思いで赤ん坊をぎゅっとする。

「駿太に会いたいから、ニュージーランドへ行くわ。博美の言う通り、嫌と言われても押しかける」

「やっとその気になって良かった。日花里ちゃんはきつと待ってるよ」

目の前の心齋橋筋商店の人波を見つめながら、わたしはもう一度、胸の中の赤ん坊の匂いをかいだ。

(了)